

学生と教員の見方

【学生の見方&考え方】
(3年 鈴木聖梧)

大学の授業の一環で、神奈川県の郊外団地型マンションとその周辺地域を見学した。この団地がある小学校区は、国道を挟んで団地がある北側と新興住宅地が広がる南側に二分されている。今回の見学では、以下の2つのことに気づいた。

1つ目は、国道の北側と南側で、子どもの数に違いがあることだ。見学した団地は大規模であるにもかかわらず、団地内に住んでいる小学生は10人と少ない。一方で、国道の南側にはたくさんの子どもがいる。また、この地域にある小学校

の児童数は約800人いて、市内では比較的多い。要するに、北側の地域には子どもが少なく、南側の道路が多く、車利用はあまり考慮されていない街のつくりになっているようだ。一方で、南側は2〜3台分の

おり、新しいまちへと変化する過程にあるようだった。しかし、曲がっている道路が多く、車利用はあまり考慮されていない街のつくりになっているようだ。一方で、南側は2〜3台分の

周辺地域との関係

南北で地域間格差

ある。団地がある国道北側の坪単価は約35万円であるの

に対して、南側は約45万円の駐車場が確保された新しい戸建て住宅が立ち並んでいる。道路も直線で道幅が広く、車の出入れがしやすい。南側は車利

【教員の展開】
(藤木亮介教授)

ている。

国道の北側と南側を實際に歩いてみると、団地がある北側は古い街並みになっていて、団地と同年代の建物と新築の建物が混在して

1960年代後半から70年代にかけては、全国でニュータウン開発が進められた。そして、この時期に建てられた郊外団地型マンションは築50年を超えており、その多くが少子高齢化に苦慮している。見学対象となった団地も例外ではなく、鈴木さんの報告のとおり、約500戸の規模でありながら、団地内の小学生はわずか10人とごくまる。こうした状況は団地周辺の住宅地でも確認される。団地の建設と同時期に周辺の住宅地も開発されたため、団地のある国道北側エリアは開発から50年以上が経過している。建て替えられた新しい住宅も少なからずあるが、見学当日は国道北側エリアに子どもの姿は見られなかった。

一方で、国道南側エリアも検討できるのではない



ポルピ
ール
【アピント】より建設
イン建物夢を
文な夢を
中です。

1960年代後半から70年代にかけては、全国でニュータウン開発が進められた。そして、この時期に建てられた郊外団地型マンションは築50年を超えており、その多くが少子高齢化に苦慮している。見学対象となった団地も例外ではなく、鈴木さんの報告のとおり、約500戸の規模でありながら、団地内の小学生はわずか10人とごくまる。こうした状況は団地周辺の住宅地でも確認される。団地の建設と同時期に周辺の住宅地も開発されたため、団地のある国道北側エリアは開発から50年以上が経過している。建て替えられた新しい住宅も少なからずあるが、見学当日は国道北側エリアに子どもの姿は見られなかった。

た。そして、この時期に建てられた

こうした南北の地域格差が生じる中で、北側エリアをどのように更新し、どのように格差を解消していくかが、地域の課題になっている。

例えば、当該団地を「人氣のある団地」に再生できた場合、どのように地域が変わるだろうか。再生された団地に多くの若者世帯が入居すれば、北側エリアに子どもたちの新しいコミュニティができるかもしれない。団地の再生は容易ではないが、約500戸という規模ゆえに、周辺地域に与える影響は大きい。地域の更新を考える際、こうした団地の再生を核とした手法

は、今まさに開発が進められ